

摂食・嚥下障害を伴う高齢者に対応する、介護労働者の負担・ストレス調査

研究代表者：今泉光雅(いまいずみみつよし)

研究分担者：鈴木俊彦(すずきとしひこ)

福島県立医科大学医学部耳鼻咽喉科学講座

著者連絡先住所 福島県福島市光が丘1 福島県立医科大学耳鼻咽喉科学講座

電話番号 024-547-1111

FAX番号 024-548-3011

Eメール ima-mitu@fmu.ac.jp

1. 背景・目的

高齢化社会が進んでいる現在、咀嚼や嚥下に障害を持つ高齢者は増加の一途をたどっており、2025年には530万人にも達する見込みである。厚生労働省が提供する平成29年人口動態統計月報年計（概数）より、死亡率を死因別にみると、肺炎（7.2%）および誤嚥性肺炎（2.7%）の全死亡者に占める割合は、合計9.9%となっており、悪性新生物、27.8%、心疾患15.2%とともに死因の大きな割合を占めている。更に、高齢者肺炎の多くが、誤嚥の有無を評価されていないために肺炎と診断されているだけで、実際は70歳以上で70%以上、90歳以上で約95%が誤嚥性肺炎であると報告されている¹⁾。全国の介護保険施設を対象とした調査によると、経口摂取の維持に関する取組を行っていない割合は42.4%、経口移行に関する取組を行っていない割合は59.3%となっている。理由として最も多かったのが「嚥下機能の評価が難しい」、次いで「依頼できる関係の専門職がない」であり、誤嚥や誤嚥性肺炎の原因となる嚥下障害の評価に苦慮し、負担となっている実態が明らかとなっている²⁾。加えて介護中の誤嚥・窒息事故に伴う訴訟も増加している。そのため、誤嚥性肺炎を引き起こす原因となる、摂食・嚥下障害を伴う高齢者の食事を介助する労働者の負担・ストレスは莫大である。更に、障害の程度により食事の介助時間が1時間以上必要となる場合もあり、その他の業務に支障ときたす可能性が高く、介護労働者の負担は大きいといえる。前述の社会状況を踏まえ、誤嚥検診の手法を用いて、福島県内の高齢者施設における介護労働者の実態調査を行った。

2. 研究方法

誤嚥検診^{3, 4, 5)}として療養型病院、有料老人ホーム、特別養護老人施設など的高齢者施設10施設へ、耳鼻咽喉科医師、言語聴覚士、看護師で訪れた。高齢者の介護に関わる労働者に対して、調査票を用いたアンケート調査を行った（図1）。

アンケートには、負担の状況のみならず、誤嚥や嚥下障害に対する知識の有無や経験

に関しても記入することとし、介護労働者の全体像の把握に努めた。本研究は、福島県立医科大学倫理委員会の承認を得て（承認日：2014年9月5日 番号2017番）実施した。調査票の回収は福島県立医科大学耳鼻咽喉科学講座が行い、全ての調査において労働者個人を特定できる情報は収集しないように努めた。

3. 結果

合計74名より有効な回答が得られた。対象の平均年齢は43.2歳であった(図2)。性別は女性が76%と3/4以上を占めていた(図3)。職種としては、看護師及び介護士が2/3を占めていた(図4)。経験年数は、10年未満が最も多く、20年、30年、40年の順序であった(図5)。高齢者の誤嚥に関して100%のスタッフが関心を持っていた(図6)。誤嚥の知識について、自信がある43%、ない及びまったくない57%であった(図7)。誤嚥に関する実際の指導に関しては、回答者の99%が勉強になったを選択した(図8)。誤嚥、嚥下障害に関して興味がないと回答した割合は0%であった(図9)。今後の対応については、定期的な健診42%、セミナー・講演52%、リハビリ・指導6%であり、対応不要は0%であった(図10)。

自由表記とした不安や負担等の意見として、「いつも誤嚥しているかどうか不安だったので確認していただけてとても安心しました。」「心配な人がいたら随時確認や指導をお願いできる体制があると助かります。」「言語聴覚士が介入していない患者さまの中に摂食嚥下障害のリスクがある方がいらっしゃるということが今回のアンケートを取って身をもって感じました。こういう機会を定期的に行っていくことが大切になってくるのではないかと感じました。」「食形態について、今の状態で安全に摂取できるのかといった不安を抱いて利用者様と関わることもあるため、(自分の知識不十分もあり)大変良い機会だったと感じた」等、不安感や、嚥下障害や誤嚥に関する専門医との、関わりを求めていることが確認された。

4. 考察

高齢者施設スタッフの100%が、誤嚥に関して関心を持っており、「誤嚥に対する知識に自信がある」の割合は43%と比較的高い結果であった。日常的に誤嚥のリスクの高い利用者の介護をしているため、高い割合となったと考えられた。高齢者施設において入居者の誤嚥や嚥下障害の問題は重要であり、直結する嚥下機能、誤嚥性肺炎、リハビリテーションは、同程度に興味のある項目となっていた。今後の対応に関する希望において、対応不要との回答は0%であり、持続的な指導や介入を希望していることが判明した。セミナー・講演会や検診を定期的実施することにより、高齢者施設入居者の嚥下機能にあわせた介護内容の検討や嚥下指導の充実が必要であると考えられた。

嚥下障害の専門家の訪問・指導は、介護労働者の負担やストレス軽減につながる可能性が高く、今後、地域における摂食嚥下に関する知識の啓蒙活動や、嚥下評価の実施などが必要になってくると考えられた。

4. 結語

介護労働者の実態及び不安感やストレスに関する調査を行った。高齢者施設における介護労働者は、嚥下障害や誤嚥に関する専門家との関わりを求めていることが確認された。専門家が介入することにより不安感の軽減が期待され、結果として離職率の低下にもつながることが予想される。施設に入居している高齢者のQOL(生活の質)を向上し、ひいては誤嚥性肺炎にともなう医療費の抑制にもつながるため、今後も地域における摂食嚥下に関する知識の啓発活動や、嚥下評価の実施などが必要と考えられる。

参考文献

- 1) 寺本信嗣：誤嚥性肺炎 オーバービュー．日本胸部臨床 68(9)，795-808，2009．

2) 合田敏尚, 菅武雄, 田山二郎: 施設入所者に対する栄養ケアマネジメントにおける効果的な経口摂取の支援のあり方に関する調査研究事業. 平成 24 年度 老人保健事業推進費等補助金(老人保健健康増進等事業). 1-88, 2013.

3) 今泉光雅: 高齢者に対する誤嚥検診の実際. ENTONI. 全日本病院出版会 196(8), 40-45, 2016.

4) 今泉光雅, 鈴木俊彦, 室野重之, 大森孝一: 高齢者施設における誤嚥検診 検査食を用いない嚥下内視鏡評価の提案, 嚥下医学 6(1) 13-21, 2017.

5) Mitsuyoshi Imaizumi, Toshihiko Suzuki, Masakazu Ikeda, Takashi Matsuzuka, Aya Goto, Koichi Omori: Implementing a flexible endoscopic evaluation of swallowing at elderly care facilities to reveal characteristics of elderly subjects who screened positive for a swallowing disorder. Auris Nasus Larynx. 2(19), S0385-8146(20)30035-3. 2020

Figure legends

図 1 施設担当者アンケート

図 2 施設担当者年齢

図 3 施設担当者性別

図 4 施設担当者職種

図 5 施設担当者経験年数

図 6 高齢者の誤嚥に対する関心

図 7 誤嚥に対する知識

図 8 誤嚥に関する実際の指導

図 9 興味のある内容

図 10 今後の対応に関する希望

施設担当者様アンケート

お手数ですが、下記アンケートにご協力下さい。

1. 施設担当者様について 年齢 _____ 性別 男性 女性 職種 _____
2. 高齢者の誤嚥に関して
とても関心がある やや関心がある やや関心はない 関心はない
3. 誤嚥に対する知識について
とても自信がある やや自信がある やや自信がない 自信がない 関心がない
4. 誤嚥に関する実際の指導に関して
とても勉強になった やや勉強になった やや無駄だった 無駄だった なんとも言えない
5. 下記の項目の中でご興味をお持ちの内容についてお聞かせ下さい。
誤嚥性肺炎 嚥下食 嚥下のリハビリ
嚥下の手術 高齢者の嚥下機能 特に興味はない
6. 今後の福島医大耳鼻咽喉科学講座からの対応について、ご希望をお聞かせ下さい。
定期的な誤嚥検診 誤嚥に対するセミナー・講演会など 誤嚥に対する実際のリハビリや指導
対応不要
7. 担当者様が不安や負担を感じたことを自由にお聞かせ下さい。

以上、ご協力ありがとうございました。

図 2

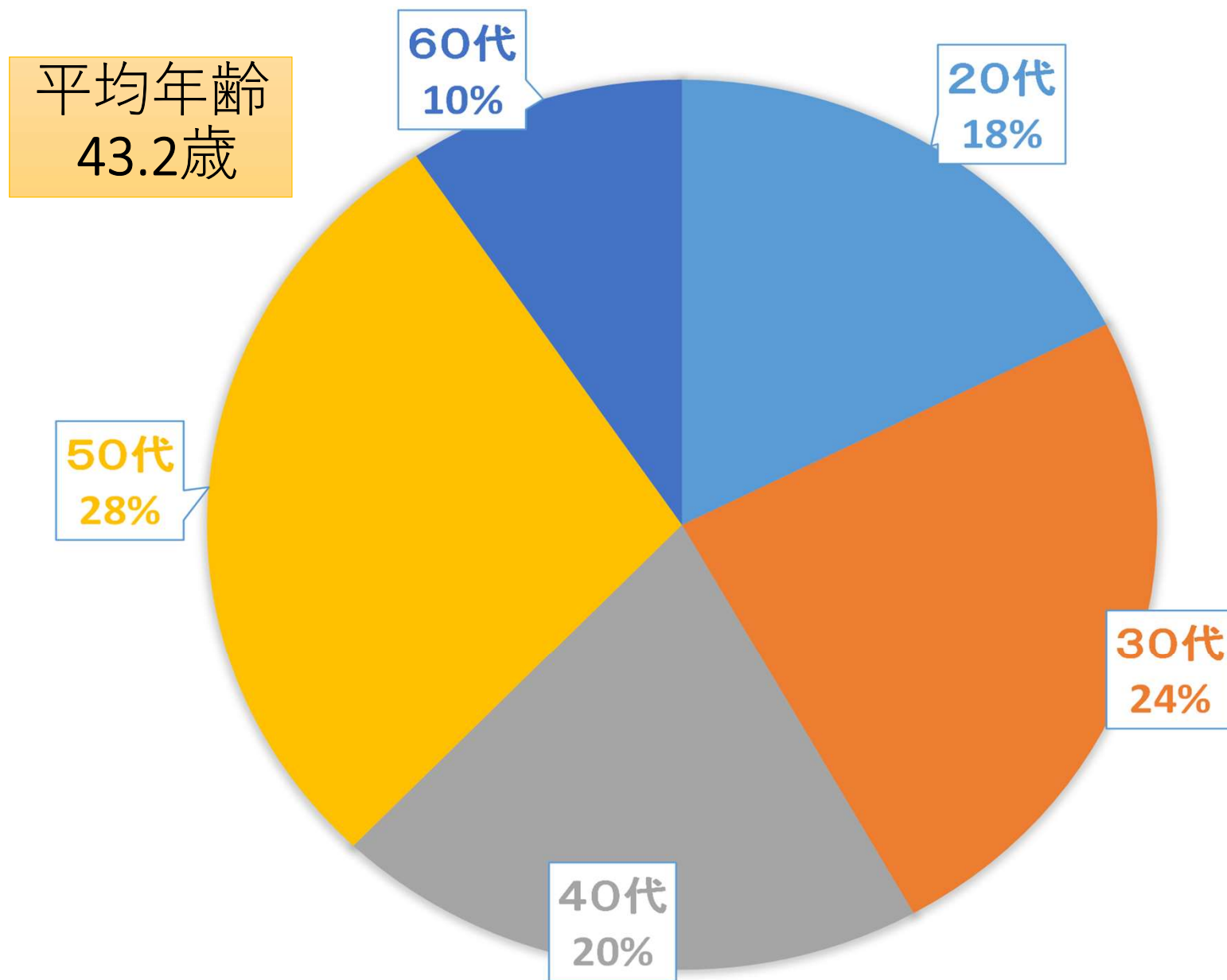


图 3

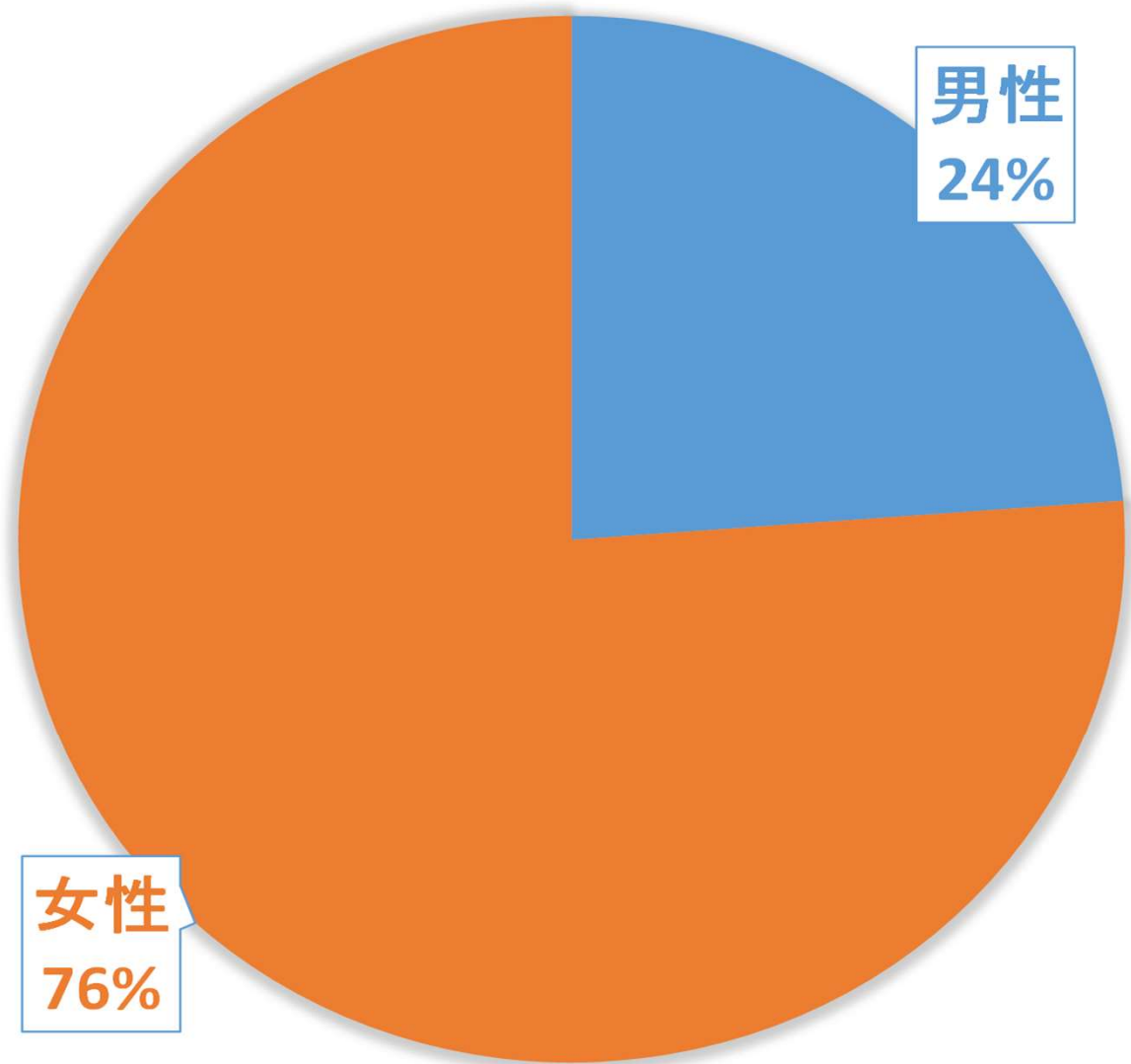


図 4

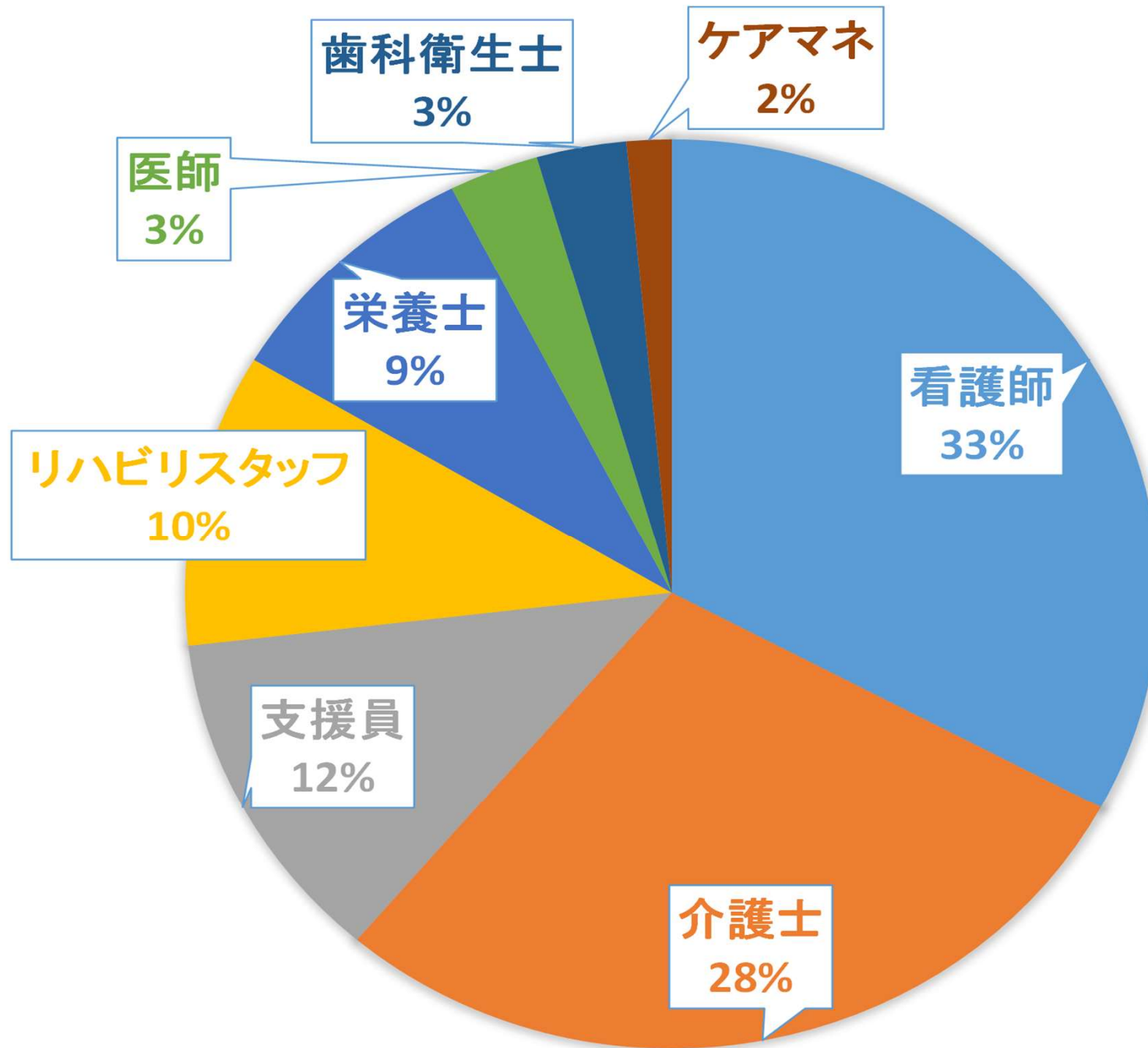


图 5

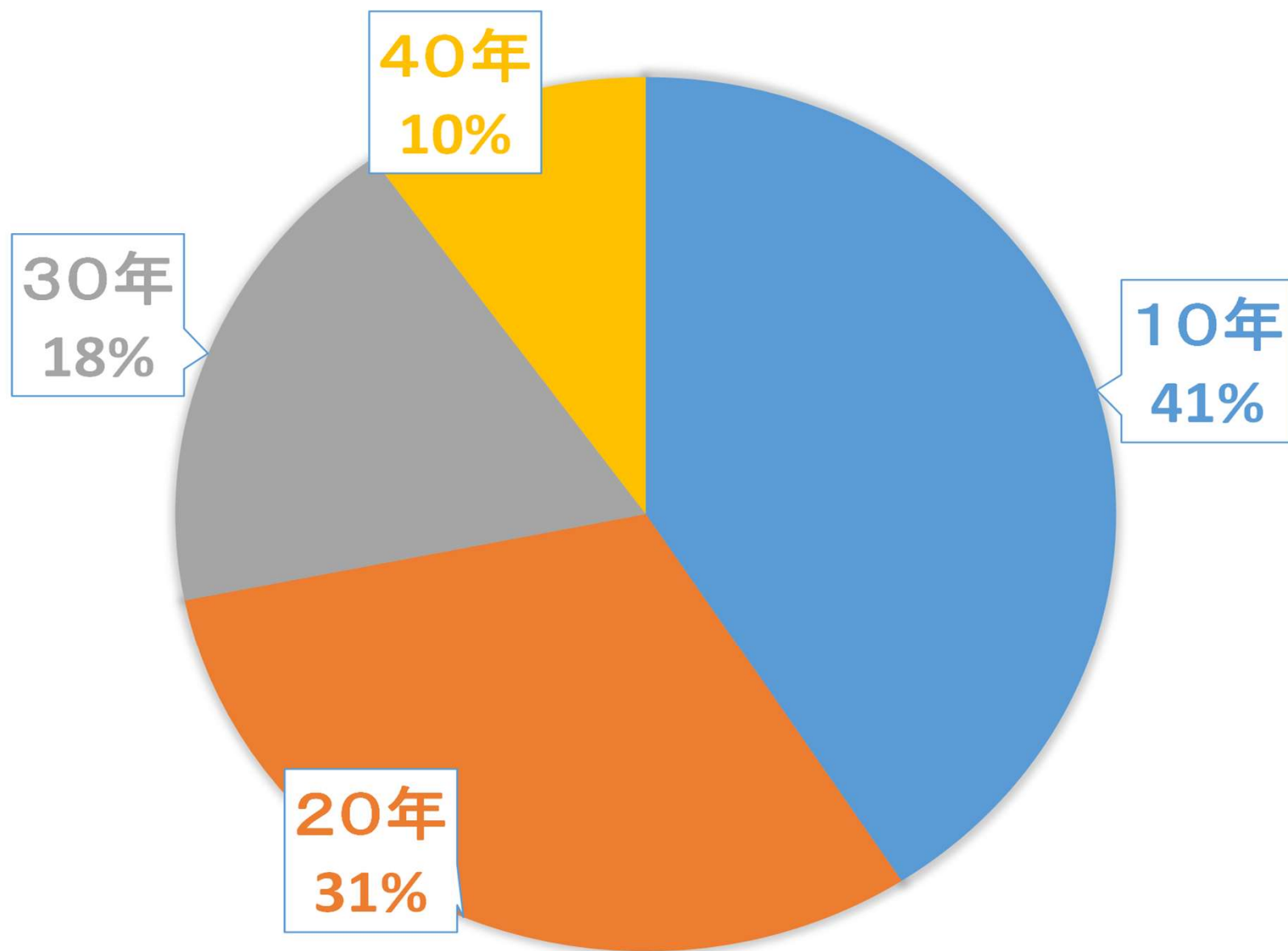


図 6

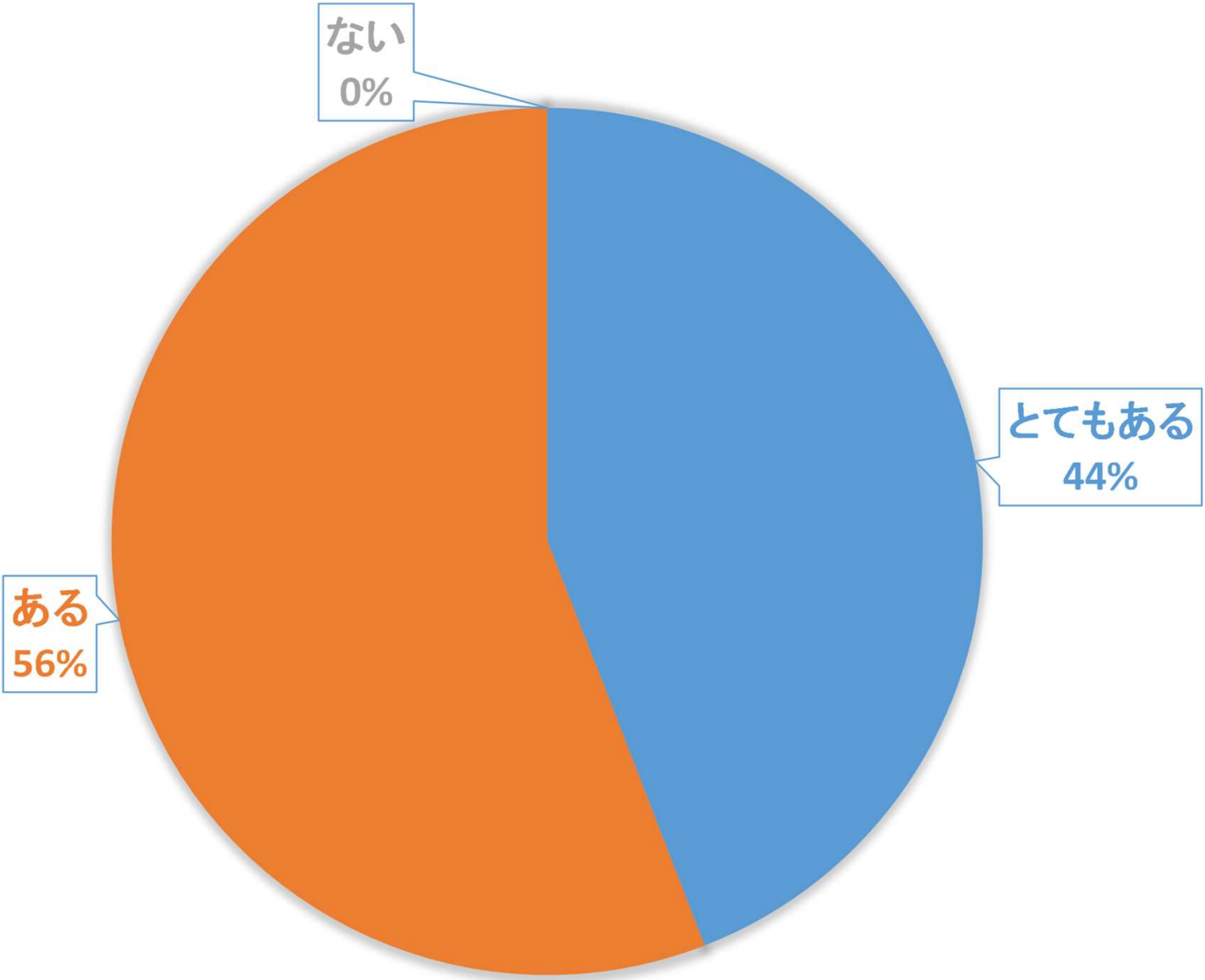


図 7

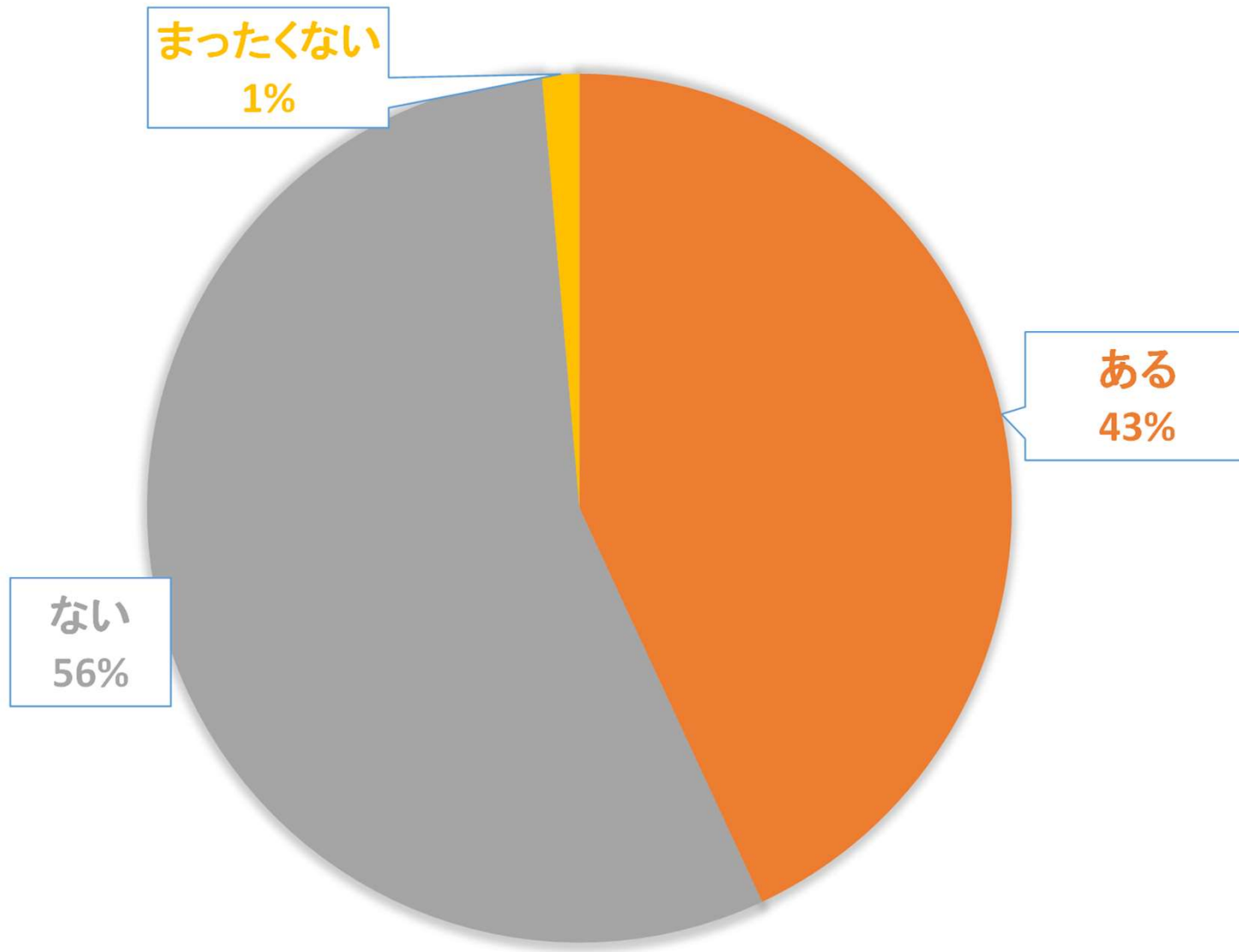


図 8

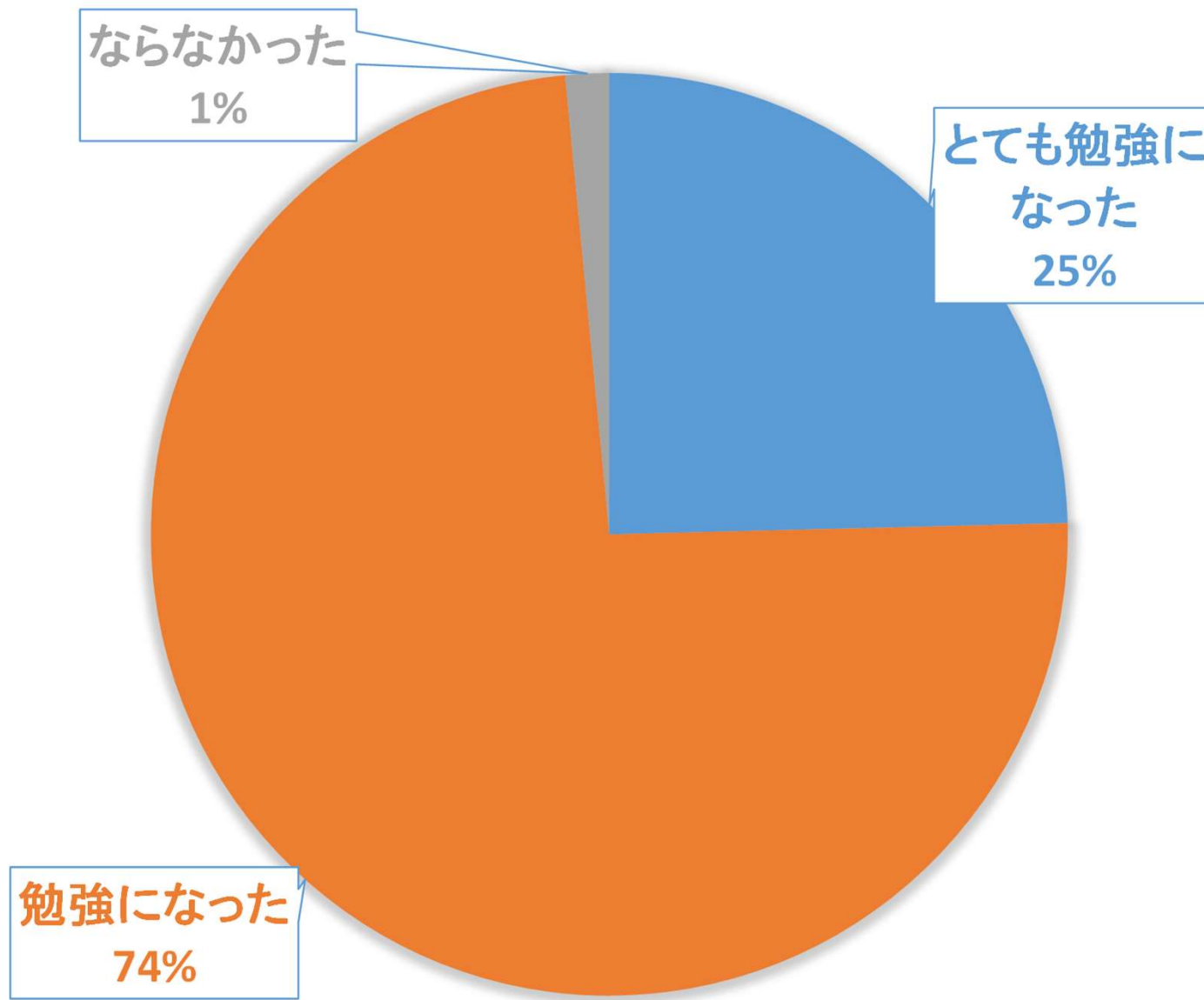


図 9

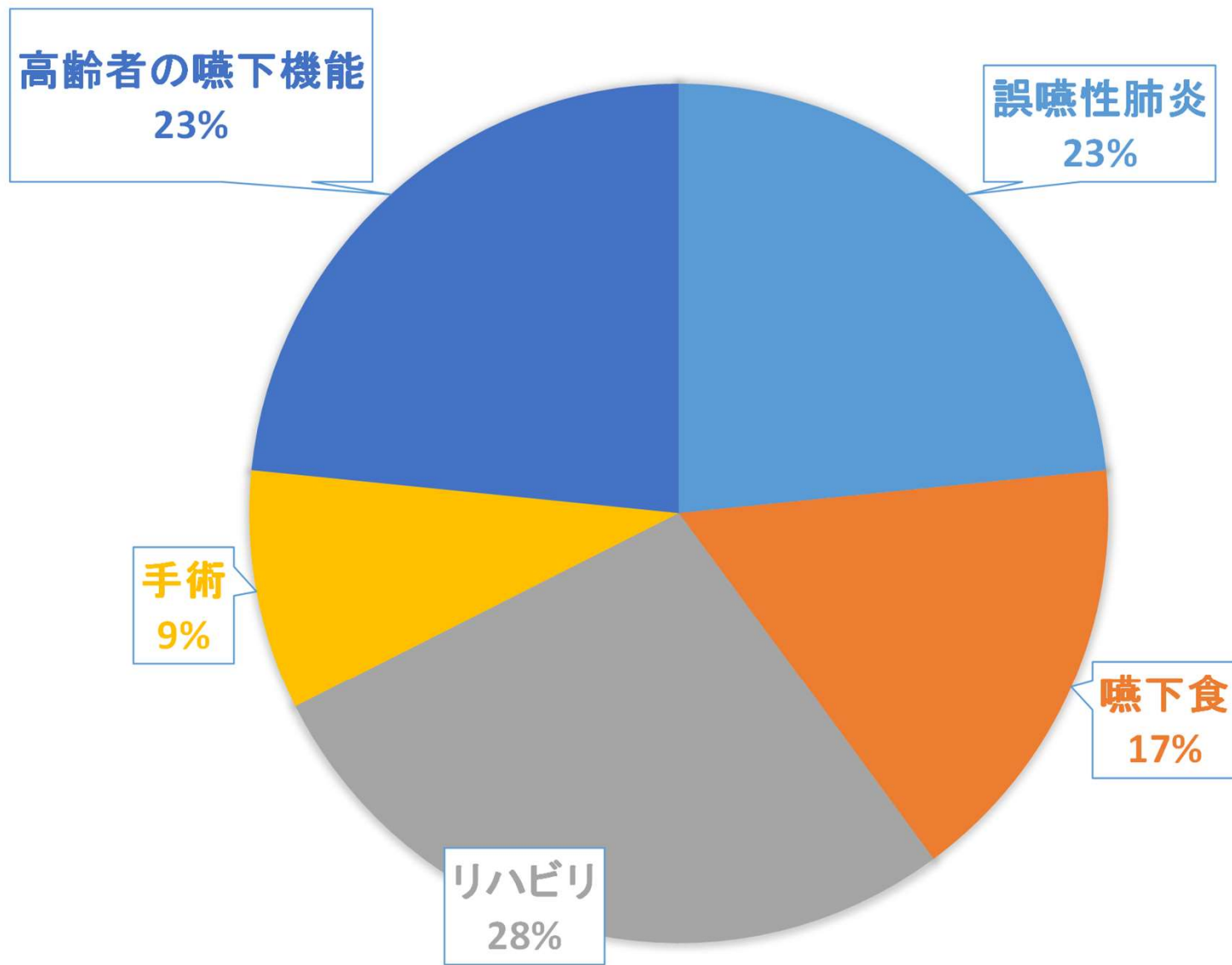


図 10

